

# 視察報告書

埼玉県富士見市、山形県長井市

令和7年10月14日(火)～10月16日(木)



山形県長井市議会議場にて

松阪市議会 環境福祉委員会

令和7年10月30日

松阪市議会

議長 濱口 高志様

報告者 赤塚かおり

### 視 察 報 告 書

標記の件について、下記の通り報告いたします。

#### 記

【I】「富士見市フレイルチェック事業について」・・・(埼玉県富士見市)

1. 日 程 令和7年10月14日(火)14:00～15:30

2. 目 的 環境福祉委員会行政視察:

3. 会 場 富士見市市役所議会会議室

4. 参加者 松阪市議会環境福祉委員会

・赤塚かおり委員長・奥出かよ子副委員長・沖 和哉委員・吉川篤博委員

・松原 里穂委員・殿村峰代委員

5. 担当者 埼玉県富士見市市議会議員 勝山 祥 議長

富士見市市役所職員 議会事務局 真倉 氏

福祉保健部 健康増進センター 平 貴美子副所長

増田大樹 作業療法士

望月多恵 作業療法士

## 6. 内容

### 1) 富士見市の概要と事業の位置づけ

埼玉県富士見市は、総人口が113,615人(令和7年9月末現在)で、そのうち高齢者人は27,058人で高齢化率が23.8%となっている。富士見市は高齢者が身近な場所で気軽に健康状態をチェックできる機会を確保し、フレイル予防を通じて「元気な街づくり」を推進している。令和2年度より段階的に事業を展開し、現在では市内全域に測定会が広がっている。

### 2) フレイル予防の基本的な考え方

栄養(食・口腔機能含む)、身体活動、社会活動の三点が重要で、フレイルは「健康」と「要介護」の中間に位置し、早期発見・早期介入が重要である。特に社会とのつながりの喪失がフレイルの「最初の入り口」になることが多いため、集いの場・地域参加の機会を意図的に設計している点が特徴である。

### 3) 事業の実施体制とおもな取組

①産・官・学・民の連携・・・産:株式会社ロッテとの包括連携協定⇒オーラルフレイル予防(キシリトールなど)に関する啓発・イベント協力、学:東京大学高齢社会総合研究機構との協働⇒科学的知見に基づいた測定プログラムの導入(「東京大学式フレイルチェック」)、官:市職員(保健師・作業療法士等)による伴走支援、民:地域のフレイルサポーター・ボランティアによる主体的な運営

#### ②フレイルチェックの展開

・市内各地で測定会を開催(年2回以上)・商店街・自治会・サロンへの出前講座。健康状態を楽しく測るためのシール方式などを導入。サポーターによる運営を基本とし、行政と専門職は後方支援に徹する

#### ③フレイルサポーターの育成と活動

・サポーター人数:46名(男性14名、助成32名)。平均年齢:73.7歳。上級トレーナー+東大の伴走支援あり。特徴は、専門職種主導ではなく、住民サポーター主導で測定会を実施。住民同士の協力により、測定と地域交流の場を同時に創出。サポーター自身のやりがいや生きがいの醸成にもつながっている。測定会の運営、商店街イベント、地域サロンなど多様な場で活躍。

#### ④参加者・サポーター数の推移

・測定会参加者数は、令和2年度:225人→令和4年度:431人→令和6年度:339人

・フレイルサポーター数は、令和2年度:13名→令和6年度:46名（着実に増加）

\*この間、市内3カ所からスタートした測定会は、市内10カ所へと拡大し、地域への浸透が進んでいる。

#### 4)費用・会計の概要(介護予防特別会計)

年度 合計費用とその主な内訳

R2 約610,000円 備品購入・印刷費等

R4 約460,000円 消耗品・測定機材ノートパソコンなど

R5 約360,000円 消耗品・備品更新

R6 約270,000円 消耗品(チェックシートなど)

\*少額の予算で持続的に事業を展開しており、ボランティアサポーターの力が大きいことがわかる

#### 5)成果と評価の考え方

富士見市では、「フレイルサポーターの活躍の場の拡大」を起点とし、介護予防・健康づくりの視野が広がり、参加者の幅が広がり、健康長寿を実現する「まちづくり」へとつなげるという、ロジックモデルを明示している。

#### 6)eスポーツを活用した社会参加の促進

・高齢者向けeスポーツを「社会参加の入り口」として位置づけ、多世代交流・ストレス解消・認知機能の活性化など複合的な効果、市内各所で「シニアeスポーツクラブ」を立ち上げ、集いの場を創出している。

#### 7. まとめと松阪市への示唆

富士見市のフレイルチェック事業は、住民主体で持続可能な介護予防体制を構築している点、産・官・学・民の多様な主体の連携を基盤としている点、「社会参加の喪失を防ぐ」ことを

出発点にしている点の特筆される。松阪市においても、地域ごとのサロン・自治会などの既存資源を活かし、住民主体のチェック事業や e スポーツなど多様な社会参加の入口づくりを検討することが有効と考えられる。

## 8. 所感

富士見市のフレイル予防は住民主体であることに主眼を置いていることにたいへん親和性を感じるが、これは専門家の作業療法士が市の正職員としていること、「伴走者が常に必要である点を見逃してはならない」ということだ。何故なら、継続的に住民の関心を引くことは容易ではない。これは、人間の脳が 3.5 日で飽きる性質を持っていることも手伝っている。自らの健康への関心は、働きかけがないとすぐに元に戻ってしまう。これを行政でシステム化してしまうことが、継続につながる。「継続は力なり」という格言の実践が、まさしく健康寿命を延ばすことにつながるのだと感じた。これが介護保険料の据え置きといった結果につながっていれば、さらに効果は絶大といえよう。翻って松阪市は、毎回保険料の引き上げ、もしくはサービスの縮小と負のスパイラルとなっている。我が松阪市は、実施事業はすべて委託である。服の上から搔くような関わり(委託)ではなく、顔の見える関係が大切であることから、直接関わるといった実施施策を多く仕掛けていってほしいものだと感じた。

委員 殿村 峰代

今回の富士見市への視察は、「高齢になっても生き生きと地域で輝き続ける」ためのヒントが詰まった、大変心温まるものであった。最も印象的だったのは、市の作業療法士の研修を受けた「フレイルサポーター」という一般の市民が、行政や専門職の「後方支援」を受けながら地域で健康づくりの先生役を務める、まさに「住民による、住民のためのフレイル予防」という仕組みであった。この活動を通じて、サポーターである市民自身に「地域のために役立っている」という大きなやりがいが生まれており、「生きがい」がなによりのフレイル予防になるのだと強く実感した。

フレイル予防というと健康体操をイメージしがちであるが、富士見市では e スポーツをフレイル予防に積極的に活用していた。ゲーム機器の接続が得意な高齢者が活躍したり、「もっとゲーム上手になりたい！」という意欲を生み出したりすることで、フレイルのきっかけとなる社会とのつながりが無くなることを防いでいる。さらに、若い世代との多世代交流にも繋がっている点にも感銘を受けた。健康づくりは、身体的な活動だけでなく、「人と会って笑い合うこと」「夢中になれる何かがあること」が極めて大切だと気づかせてもらった。

富士見市の先進的な取り組みから、松阪市においても、作業療法士などの専門職が「そっと支える応援団」に徹し、高齢者の「やってみたい」「役に立ちたい」という気持ちを大切にしながら、健康体操だけでなく、趣味や役割を持てるような多様な社会参加の機会を創出し、誰もが地域と深くつながり、笑顔で過ごせるようなまちづくりを進めていきたいと思う。富士見市で

今後展開する、株式会社ロッテとのオーラルフレイルの連携など、最新の取り組みも参考にしながら、松阪市の高齢者福祉をさらに充実させていきたいと考える。

委員長 赤塚かおり

## 【Ⅱ】「遊びと学びの交流施設 くるんと」・・・(山形県長井市)

1. 日 程 令和7年10月15日(水)14:00～16:00

2. 目 的 環境福祉委員会行政視察:

3. 会 場 長井市市役所議会会議室

4. 参加者 松阪市議会環境福祉委員会

・赤塚かおり委員長・奥出かよ子副委員長・沖 和哉委員・吉川篤博委員

・松原 里穂委員・殿村峰代委員

5. 担当者 「くるんと」施設長 滝口 友和 様

地域づくり推進課 補佐兼生涯学習推進室長 風間 陽一 様

6. 視察目的

視察に至った経緯:松阪市の子育てや高齢者の方々の居場所づくりを松阪市で強化するため

7. 視察内容

①見学した施設や取り組みの概要・・・遊びと学びの交流施設 くるんと図書館

②実施している事業・・・<https://kurunto.jp/>《子育て世代活動支援センター》

◆屋内遊戯場・・・広いボールプールや木製のおもちゃで遊ぶエリア、親子で絵本を読むエリア等があり、天気が悪い日でも屋内でのびのびと遊ぶことができるあそび場。※対象年齢 12歳(小学6年生)まで

◆一時預かり・・・お買い物や通院等の際に、乳幼児を一時的にお預かりすることが可能

◆子育て支援センター・・・子育てに関する相談受付等、気軽にご利用可能

◆ファミリー・サポート・センター・・・子育てのお手伝いをしたい人(協力会員)と、お手伝いをしてほしい人(利用会員)をマッチングするサービスをご利用可能

#### 《図書館》

◆「本を読む」、「本を借りる」だけでなく、「自宅」「学校や職場」に続く、居心地のいい「第3の場所(3rd Place)」として幅広い世代の人が滞在できる空間。

◆学習室兼視聴覚室・・・学生さん向けの学習室としてだけでなく、映像の上映会での利用など、視明教室としてもご利用可能

◆ボランティア室・・・図書館ボランティアの方の作業スペースとしてご利用可能

◆コワーキングコーナー・・・集中してお仕事や勉強をしたい方向けの、半個室の作業ブースを設置

◆閲覧カウンター・・・建物西面の壁際に設けられたカウンター席では、外の緑のひろばや長井線の列車が走る様子を眺めながら、本を読んだりくつろいだりして過ごすことが可能

#### 《エントランスホール》

◆「くるんと」の玄関口となるエントランスホールは、天井が高く開放感がある空間になっており、西側の出入口から緑のひろばに抜ける通路を設置。

◆ギャラリーは施設や市による展示のほか、展示架貸し出しにより市民の方による展示スペースとしても利用可能

◆交流ラウンジはカフェを併設した交流ラウンジでは、落ち着いた雰囲気の中で飲み物や軽食をとりながらゆっくりと過ごすことができる空間

## 8. 視察結果

### ① 視察で得た具体的な情報

・総額業費 41億8,000万円 国土交通省 都市行動再編支援事業 50%の補助、コロナの交付金等で市負担1割。施設運用は株式会社エムシーアイ社(本社:大阪市中央区)に委託。改装前と比較し図書館面積が広くなり、来館者数は8倍、図書貸出数は1.8倍に増加。屋内遊び場+図書館運営費 年間約1億2,000万円 ※第二世代交付金で半分

補助。来館者年間 35 万人(開園から延べ 71 万人の来館者)。「くるんと」来館者1日平日平均 180 名 土日祝日平均 350 名、最大一日 1400 名以上。「くるんと」幼稚園年長・年中～小学生年少が一番多く来館。山形県内に室内施設情報

寒河江市 クラッピンサガエ(<https://www.claapin-sagae.jp/>)

米沢市 アクティー米沢(<https://acty-yonezawa.com/kutemo/>)

・来館者内訳 長井市西置賜 3 割、米沢 3 割、山形市 3 割、県外 1 割(新潟・宮城・福島※車で来館)。一時預かりの運用を委託している 利用者 50-60 名(月)。最大 1 日 5 名まで 30 分 100～200 円(年齢による)。蔵書は約 8 万冊(規模に対して少なめ)。図書購入費予算は年間約 400 万円で増額なし。長井市は高齢により免許を返納したら 1 年間バス利用無料。全員が利用できる 1 か月 1000 円のバス定期券あり

## 9. 課題

- ① 利用者層の偏り・・・低年齢層とシニア層が多く、30～50 代の利用は低迷。
- ②学習スペース不足・・・学生利用増により、試験期間は開館前から行列。座席不足。読書スペースと学習スペースのゾーニング検討が必要。
- ③移住・・・経済効果には結び付きが弱い。他県から1時間～1時間半ほどの距離で、移住しなくとも利用が可能であり、「くるんと」以外での観光地化が弱いため、お金を落としてくれる場所が少ない。
- ④交通手段の少なさ・・・長井市内でのバスは充実しているが、長井駅の電車が 1～2時間に 1本しかないため、遠方からのご来館は車がないと不便。
- ⑤蔵書充実のための予算不足・・・広くなった館に対して蔵書数が相対的に少なく、魅力向上のための新規購入が困難。
- ⑥その他・・・他自治体の動きについては、このニーズを受け、仙台市青葉区では東北最大級の屋内遊び場を整備中(2029 年度開業予定)

## 10. 施策提案

今後の政策提言案(継続調査が必要)・・・松阪市人口は長井市の約 7.5 倍(長井市人口 24,123 人)→子育て支援施設等と連動すれば潜在的利用者の増加余地の可能性あり。0

歳児から年齢別または用途別等の配慮がある室内で遊ぶ場所が少なく、また子供たちが遊べるスペース+飲食が可能な施設が少ないため引き続き可能性を調査が必要。

## 11. 所感

今回の視察で感じた要点は2つ。まず長井市の歴史があったからことから現在があると感じるデザインになっているということ。「くるんと」や図書館はかつて郡是の縫製工場があった跡地であり、100年の長い歴史に幕を閉じたきっかけで建てられた施設のため、繭をイメージした建物のデザインになっている。これは長井市にとって養蚕業が盛んだったこと、沢山の雇用を生んだことが伝わり、歴史を残している空間になっており、先人たちが積み重ねた努力が次世代にも語り継がれている。

次に長井市の踏み切った予算の使い方だ。子育てを本気で支援しようとしたら相当な予算と市民の同意が必要になってくる。「くるんと」は、自宅・職場・学校次ぐ、第三の居場所「サードプレイス」として場づくりの工夫が凝らされている。一見、子育て世代のみに支援が傾いていると思いきや、どの層にも利用しやすいように空間づくりに徹底された図書館やカフェの併設があるため、市民からの声は賛同の声ばかりだという。また様々な交付金や補助金等の情報を活用している。松阪市は公報的観点でもまだまだ発信や施策、ストーリー性が弱く、研究を重ね独自の政策が必要であることも確信した研修だった。本市のこれからの余地があると強く感じ、誰もが住みたいまちになるように目指していきたい。

委員 松原 里穂

山形県長井市の「くるんと」は、市民や観光客、幅広い世代の皆さんが集い、楽しい時間を過ごせるようにという思いでまちなかの拠点として作られていた。LINE登録者が2.5万人というSNSでの周知も素晴らしいが、担当者が「来てくれた人が楽しんで帰っていくことが一番の宣伝、つまり口コミが一番効果的です」とおっしゃっていたのが心に響いた。施設の魅力そのものを高めることが最高の周知になるという考え方は、松阪市でもぜひ見習いたいと思う。

この施設のおかげで市外からも多くの方が訪れ、関係人口が増え、大手チェーン店も進出するなど良い流れはできているが、残念ながらまだ移住者の増加には繋がっていないという課題も伺った。

松阪市に目を向けると、「くるんと」のような天候に左右されない屋内遊技場や複合施設は、子育て世代にとっての大きな魅力となり、市民の新しい交流の場を作り、結果として関係人口をさらに増やすきっかけになるはずである。長井市の成功と課題の両方を参考に、松阪市でも誰もが気軽に立ち寄り、子育て世代や子どもたちが笑顔になれるような屋内遊技業の検討があっても良いと感じた。

委員長 赤塚かおり

## 写真一覧



くるんと①



くるんと②



おむつの自販機



令和5年に設立された議場で全員写真